

「はじめの一步」

清宮 聡子

幼稚園での生活が始まり、まだ間もない年少組、

子どもたちは初めて出会う環境の中で少しずつから

だが動き、心が動き始める。当たり前だが、二十人

は二十通りのこころの色をもちながら一日一日を積

み重ねる。

子どもたちが「はじめの一步」を踏み出すときに

何を大切にするのか、R子、M夫、A子の姿を通し

て考えた。

確かめる

母からやつと離れることができるようになったR

子は「せいみや先生、せいみや先生」と数分間のう

ちに四回ほど私を呼ぶ。私はそのたびにRに顔を向

けて「Rちゃん、なあに」と返すが返事は「……」

である。R子は絵を描いたり、細かくちぎった紙を

のりで貼り付けたりしながらも、その手を止めて私

を呼ぶ。そして、「Rちゃん、なあに」という私の

返事を聞くとまた、自分がしていたことの続きを始める。傍にいてもそのやり取りは繰り返された。

R子は私の居場所を確かめること、呼べばこたえてくれるということを確認することで、何とか安心感を得ようとしているようであった。R子が呼ぶとき「なあにRちゃん」と、できる限り応えようと心掛けた。

五月の連休が明けた頃、R子の私を呼ぶ回数は少しずつ減っていった。そして、不安そうにしていたR子の似顔絵を描いてくれたT子に自分から声を掛けるようになった。

「おねえさん！」

はつきりと「せいみや先生」と呼ぶR子同様に、M夫も大きな声で私を呼ぶ。ただ、その呼び方が他の子どもたちとは明らかに違う。M夫は何かしらにいたい時、話をしたい時、「おねえさん！ おねえさん！」と呼び掛ける。その語尾の強さはなんと

も言えない。まるで、お客さんが店員さんに注文を

お願いするような勢いである。M夫の母は、朝その呼び掛けを聞く度に、「Mくん、『先生』って呼ぶんでしょ」とM夫に伝える。「家でも『先生』って呼ぶように言っているんです」M夫の母は困惑して私に話す。しかしM夫は、母の声を振り切るように大きな声で私を「おねえさん！」と呼ぶ。そして、私がM夫のほうに顔を向けると、ものすごい勢いで自分の興味のあるポケモンの話や気になる同じクラスのA子のことを話し始める。

幼稚園で「おねえさん」と呼ばれるのは初めてだった。入園式があり、保育が始まり、子どもたちから呼ばれる時には「先生」と呼ばれることが常だった。「おねえさん」と呼ばれることに抵抗感は無かった。しかし、クラスの中でM夫以外は「先生」と呼んでいる。まだ、M夫の呼び掛けを「変だ」とか「違っていい」と言う子どもはいない。時々『せいみや先生』って呼んでもいいのよ」と変

に遠回しな伝え方をしてみる。しかし「いいの！」と返されるばかりだった。

「先生」ということばを知っているとと思われるM夫。いつかは呼び方が変わることもあるだろうと思ひ、また、その変化はM夫のどのような心のうちを表すのだろうかと考えた。

M夫が「おねえさん！」と呼ばなくなったのは五月の半ばを過ぎた頃だった。

入園当初、M夫から呼ばれた時に、私がすぐに対応できず、「少し待っていてね」と応えるとM夫の声は一層大きくなった。そして、姿勢を低くしてほかの子どもに向いている私の顔をいつの間にか両手で挟み、自分の方を向かせようとするのだった。周囲の子どもたちの表情が険しくなるのが感じられた。強い要求は一日に数回あった。その一つひとつは靴の履き替えや、一緒にお手洗いにいくことや、コップとタオルを鞆にしまってもらうことなど、一日の流れのなかで決まった場面でのことが多かつ

た。「おねえさん！」と言いながら落ち着かない様子を見せるM夫、私はなるべく呼ばれる前に、M夫が決まって訴える要求に応えるようにした。変化は少しずつだったが表れた。先にこちらから声を掛けることで、M夫との関わりはスムーズになった。園庭に出る時、「靴、履き替えるわよね」と声を掛けると「うん、Mくん一人じゃできないの」と素直にこたえる。お手洗いにいく時も大騒ぎせずすむし、コップやタオルも先に私が手にすることで、支度をした後、落ち着いて席に座るようになった。その姿を前に、M夫の緊張や混乱が「おねえさん！」ということばに、表れていたのだと感じた。

そして、次第に「おねえさん！」と呼ぶ声は聞かれなくなった。その代わり、何か伝えたいことがあるときは私を大きな声で呼ばずに、近くに来て話をするようになるようになった。また、こちらがすぐに対応できなくても、何とか自分を保ちながらいるようになった。加えて、自分が出来ないところだけを手

伝つて欲しいと言うようにもなった。

六月になりM夫は、汚れるから嫌だと言つていた砂場にも面白さを見出したようで、積極的にに向向く。教師の側がM夫の要求を受ける前に働きかけたことだけが、M夫の今の姿につながっている訳ではない。しかし、R子やM夫のように、教師に繰り返す呼び掛ける、要求を強く出す、といった表し方をする子どもたちにとつて、その発信は緊張や不安の裏返しでもある。教師がどう受け止め、返していくかということは、やはり重要なことであると改めて思った。

「私、話したいことがあるの」

一見、四月生まれのお姉さんといった感じのA子。園が始まった四月はもちろん、五月になって母から何とか離れることができるようになって、離れるときにはいつも涙を浮かべている。母と別れた後は、片時も教師の傍を離れまいと手をつなぐ。こちらの

誘いかけにも答えが返つてこない。当然、A子自身を選び取つてなにかをするということにはなかつた。だが、私が数名の子どもたちと園庭へ「ピクニック」に行つたり、保育室でおままごとをしたりする場面には必然的に、いつも一緒に加わることになった。

五月の連休が明けた頃、A子がお山に向かう道の途中で突然「私、話したいことがあるの」と思いつめた表情でことばを發した。それは、A子が初めて私に話し掛けてくれた瞬間であつた。今までに聞いたことの無い力強い声だつた。それまでのやり取りは、私と話しかける一方で、A子は頷いたり、時には何も返さず、硬くなつてしまつたり、という風だつた。

「私、話したいことがあるの」と言われた瞬間、私は、嬉しさと、「どんな話なのだろう」という期待でドキドキしながら、A子に「どんなお話なの」と返した。A子は少し俯きながら「私、アイスクリームが好きなの」とことばにした。思いがけない告白に意表をつかれた。「どんな味のアイスが好きなの？

私はチョコレートアイスがすきだなあ」と答えた。A子はしばらく考えてから「イチゴの味がいい」と小さな声で言った。その後、スラスラと会話が続き訳ではないが、A子が私にことばでなにかを伝えようと、一步を踏み出した瞬間だった。

「ハムサンドがいい」

その次の週にも変化が見られた。年長組のI子やN子らが「サンドウィッチ」を年少組の保育室に届けてくれた時のことである。N子は「こっちでお店もしてるから」と言ってお店の前の廊下でお店が開かれていることを示した。私と手をつないでいるA子はお店のほうをじっと見つめていた。

「Aちゃん行ってみる？ お店屋さん」と尋ねるとA子は黙って頷いた。長い廊下を歩いて、お店屋さんに行くのはその日が初めての体験となった。一緒にままごとをしていたO実やS子らをはじめ、R子やT子、日夫も一緒に出向いた。一塊になりなが

ら廊下をゆっくりと歩いた。お店に着くと、年長組のI子とM実が元気よく「どんなサンドウィッチがいい？」と聞いてくれた。

「メニューもあるよ」と

言って「かつサンド・ハム

サンド・野菜玉子サンド」と書いてあるメニューを渡してくれる。私が、種類のサンドウィッチの名前を伝えると、反応の早いO実やS子はすぐに「かつサンドがいい」と注文する。一時に注文が来てしまい、急に忙しくなったお姉さんたちは、懸命に鉢を動かし始める。その様子を真剣に見る年少組の子どもたち。感心するほど、じっと並んで待っている。

少し表情が硬いが、A子もその場で、お店の様子を見ている。A子にどれが欲しいのか、時間が掛かって、示して欲しいと思った。「Aちゃんどれ



「がいい？」と聞いてみると返事は無い。「いろいろあるから迷っちゃうわね」と言つて、A子の返事を待った。そして、もう一度、「Aちゃん何にするか決まった」と尋ねた。すると、「ハムサンドがいい」と一言、意思のあるつぶやきがA子から聞かれた。

サンドウィッチ屋に行ったことをきっかけに、廊下に出ているお店やさんに行くことがA子の日課になった。サンドウィッチ屋に行った時に覗きに行つた年中組の「お魚屋さん」は、大勢で押しかけていっても快くお魚を売ってくれる。「これください」「これがいい」A子が自分からお店の人に伝える場面も見られるようになった。

その後数日間、A子は毎朝、「お店に行きたい」と私に伝えた。その他には殆ど声を出さないA子。しかし、私の傍にしながら他の子どもたちとの会話を良く聴いている。面白い内容だと感じると、自然に笑みがこぼれるようになった。そして、少しずつ私と距離を置き、手をつないでいなくてもいられる

時間が長くなった。また、ままごとなど子どもたちが寄り集まってしていることを遠巻きに見るようになった。積極的に入ることはないのだが、私と一緒に集まりの中にいた時の硬い表情のA子に較べると、からだから緊張感がわずかに抜けて、表情も柔らかい。ただ、こちらが声を掛けても「私もする」というようにはならなかった。

「私も作りたい」

五月も終わろうとする頃、T子が作った「アンパンマン」のペープサートが子どもたちの間に広まった。形は思い思いで、大きな顔を描くひと、他のキャラクターを描くひととそれぞれであった。そのうち、それを動かして遊ぶようになった。人形劇のイメージはあるのだろうかと思ひながら衝立を置いてみた。するとS子はすぐに、衝立の後ろに立って人形を動かし始め「アンパンマン劇場にしよう」と言い始めた。O実やD子、S夫も紙の切れ端に顔を描

いて手にしている。S子は「こんにちは！」と言って人形を動かす。一人アンパンマンになりきっている。その横でO実はいキンマンを動かしている。

あつという間に衝立の後ろが賑やかになった。その様子を私の傍で見ていたA子が私の顔を見上げ、「私も作りたい」と言った。ペープサートの楽しげな動きと、保育室に広がる明るい空気が、A子を誘い、包み込んだのかもしれない。心が動き、自分もやってみたいと強く思ったA子がまた一歩踏み出したのだった。

六月になり「私、お砂場に行く」と言ったりするようになったA子だが、母と離れると、すぐに、私と手をつないで、しばらく行動を共にすることは変わらない。私の居場所がわからなかったり、お山を駆け回ったりすると、不安になる。

一歩進んでまた……

入園して数ヶ月の子どもたち、当然ながら一歩進

んではまたもどり、そしてまた……という様子である。幼稚園を少しずつ安心して過ごせる場と感じ取って欲しい。

始まりのこの時期、子どもたちとの何気ないやり取りや、子どもたちのつぶやきに耳を傾けることの大切さを特に感じる。そして、子どもたちに安心感を与えるために手をつないだり、笑顔でこたえたり、ことは掛けだけでなく、全身で受け止めることの大切さを多くの場面で思う。小さな一歩を見逃さず、その先の広がりにつないでいけるよう、日々気持ち新たに子どもたちと生活していきたいと思う。

泥粘土をしていたR子が少し距離を置いて見ているA子に「A子ちゃんも、一緒にしようよお」と可愛らしく声を掛けた。その声にA子の頬が少し緩んだ。一緒にするようになるのもう少し先かも知れない。ただ、R子の優しさは確かにA子に伝わったようであった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)